

令和3年度 さいたま市立大砂土小学校 自己評価書

校長 山下保夫



1 学校で設定した「令和3年度の目標」及び関係する「評価項目」について

(1) ICTを活用した学びの改革により、真の学力をはぐくむ

- ①十分な教材研究に基づく教材・教具の工夫等により、児童の「真の学力」を育成する学習指導を行っている。
- ②児童の読書への興味・関心を高める指導の工夫を行っている。
- ③授業中に適用問題を解く時間などを確保し、個に応じた指導を行うことで、知識・技能の定着を図っている。
- ④話し合ったり書いたりする学習活動の充実を努め、思考力・判断力・表現力の育成を図っている。
- ⑤授業中、めあてや見通しを明確にし、児童が活動する時間や自己評価する時間を十分確保した学習指導を行い、主体的に学習する態度の育成を図っている。
- ⑥学習指導要領に即した学習活動を、確実に実施することができている。

(2) グローバル社会で活躍できる豊かな人間性と健やかな体の育成

- ①児童のよさを見付けたり、個性を認めたりして、褒める指導を行っている。
- ②「特別の教科 道徳」において、指導法の工夫改善に努めている。
- ③特別教育支援研修で得た知識を生かし、指示は短く、簡潔にするなど児童の特性に合わせた指導・支援ができている。
- ④子どもたちが進んで運動に取り組み、体を動かすことの楽しさや達成感を味わう体育指導を行っている。

(3) 明るく、落ち着いた潤いのある環境の整備

- ①「心を潤す4つの言葉」の推進と定着を図っている。
- ②いじめ等の問題行動の早期発見に努めるとともに、その解決のため教育相談日や各種部会を活用して、適切な指導に努めている。
- ③児童の安全確保のために、施設・設備の点検・環境整備等を定期的にかつ随時行っている。

(4) 保護者・地域と目標を共有し、一体となって子どもたちをはぐくむ

- ①積極的に児童へ挨拶をしたり、挨拶の大切さを指導したりして取り組んでいる。
- ②保護者、地域のボランティア等と連携し、児童が安全に登下校することができている。

(5) 持続可能な指導體制の構築

- ①「学校における新しい生活様式」の定着を図る等、感染症予防への対応に努めている。
- ②業務改善の視点から、学校運営の効率化を図っている。

2 評価結果について

学校経営方針に基づいた評価に重点を置き、評価項目を焦点化することで、次年度の課題が明確になるよう工夫して実施した。

- 肯定的な回答が多く、概ね良好な結果であった。特に『特別の教科 道徳』の指導法の工夫改善や「安全な環境づくり」、「保護者や地域のボランティア等との連携、安全な登下校」、「学校における新しい生活様式」への対応、学校安心メールや学校ホームページを使った情報発信、感染症予防」では、全ての評価者において、肯定的な回答が9割を超えており、十分な成果を得られていると言える。
- 「業務改善・学校運営の効率化」(教職員項目のみ)では、肯定的な回答が前年度比15ポイント増加した。
- 昨年度の課題項目であった「読書活動」では、全ての評価者において、肯定的な回答が前年度比6ポイント増加した。
- 「体育授業や体力向上」、「思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習する態度」、「個性を認め、褒める指導」、「挨拶」、「いじめ防止、教育相談」では、他の項目と比べて保護者の肯定的な回答の割合が低かった。

3 次年度に向けた具体的な改善策について

- 「思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習する態度」を含む「真の学力」を育成するために、タブレット型端末を効果的に活用した授業の工夫改善を進める。また、家庭との連携を図りながら、端末を利用した家庭学習の行い方を提示し、保護者の理解と協力を得られるように取り組む。
- 「個性を認め、褒める指導」では、「認める・褒める」ことやコーチングマインドを通して、児童の自己肯定感を高める。また、感染防止対策を徹底し保護者や地域への授業公開を行い、児童と教員のかかわり方を理解していただく。
- 「挨拶」では、コミュニティ・スクールの実施に伴い、保護者・地域の協力を得て、学校、保護者、地域が一体となって取組を推進する。
- 「いじめ防止、教育相談」では、「人間関係プログラム」や『いのちの支え合い』を学ぶ授業、「心と生活のアンケート」を活用し、保護者、スクール・カウンセラーやスクール・ソーシャル・ワーカー、関係機関と連携を図り、きめ細やかな対応を徹底する。
- 「体育授業や体力向上」では、感染症対策を講じた上で、運動量の確保や運動の習慣化の啓発を実践する。